

第二言語における発音習得プロセスの実証的研究

文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)課題番号 16520357、研究代表者：戸田貴子

<調査目的>

いわゆる「外国語なまり」の強い日本語学習者（NNS）の発音は、日本語母語話者（NS）にとって聞きづらく、内容が伝わりにくいことが多い。このような場合、NNS の発音は intelligibility（誤用を含んでいても発話意図が NS によって理解可能である）という基準を満たしていないということになる。仮に、日本語教育における音声習得の到達目標が NS と同じ発音を習得することではないとしても、発音上の問題によって発話意図が誤解されたり、理解可能でなかったりした場合は、多くの教師がそれを問題視し、指導の必要性を認識するであろう。このように、教育現場においては、発音に問題がある NNS のみが指導の対象となり、発音が上手な NNS は「問題がない」として見過ごされがちである。しかし、発音習得度の高い NNS には何らかの共通性があるのではないだろうか。年少者として言語学習を開始した NNS のほうが成人してから学習を開始した NNS より発音が上手だとか、音楽的能力と発音の上達度には関係があるのではないかというようなことはあくまで印象論に過ぎず、各種の個人的要因を総合的に分析対象とした研究は行われていない。

そこで、独立変数を言語（日本語・英語）レベルとし、従属変数を個人的要因（例：母語、目標言語を話す国に滞在し始めた年齢（以下、到着年齢）、学習開始年齢、渡日経験、学習期間、学習動機、発音学習の有無、教師訂正の有無、目標言語が話されている社会への心的距離、音楽的能力、各種ストラテジー）とし、その相関関係を分析することにした。

¹ NS によって発音が上手であると評価された NNS の特徴を探り、第二言語習得において母語干渉が最も顕著に現れるといわれる音声を彼らがどのようにして習得したのかということ明らかにすることにより、音声教育への応用が可能であると考え。

<先行研究>

国外における第二言語習得に影響する要因に関する研究には、移民を調査対象としたものが多く、年齢と習得との関係が代表的な研究課題の一つとして挙げられる。

年齢が習得に影響を与えるという仮説は、思春期を境に第二言語習得能力が衰えていくという考え方が基盤になっている。具体的には、6歳前後に学習を開始した場合は、ネイティブレベルの習得が可能で、12歳以上で学習を開始した場合は、外国語のアクセントが残るとい、いわゆる「臨界期仮説（Critical Period Hypothesis）」を支持する研究が多い。また、研究者によっては「年齢制約（Maturational Constraints）」や「（言語習得上

¹本研究は、中国、韓国、ベトナム、フィリピン、イギリス、アメリカなど、言語文化背景の異なる日本語学習者と、日本人英語学習者を対象とした音声習得研究プロジェクトの一部である（文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)課題番号 16520357、研究代表者：戸田貴子）。

の) 感受期 (Sensitive Period)」と呼ぶこともある (Suter, 1976; Oyama, 1976; Purcell and Suter, 1980; Flege, 1988; Patkowski, 1990; Thompson, 1991; Flege and Fletcher, 1992)。しかし、言語習得において年齢による制約が見られる原因については、脳の側頭化や神経の髄鞘形成等による生態学的要因 (Lenneberg, 1967; Long, 1990)、言語音の知覚範疇化等による認知心理学的要因 (Flege, 1992; Rochet, 1995)、社会心理学的要因 (Bialystock and Hakuta, 1994) など諸説あり、明らかではない。また、Long(1990)は発音の習得は到着年齢にも関係していると述べている。しかし、最近の研究では、思春期以降にネイティブレベルの言語能力を習得した例や (Moyer, 1999; Bongaert, 1999)、年長者でも学習動機が高ければネイティブレベルの言語習得が可能であるということが報告されている (Marinova-Todd et al. 2000)。また、Singleton (2001)や Moyer(2004)は、社会言語学的要因 (年齢によって社会との関わり方が異なる) や個人的な要因 (アイデンティティー・言語的必要性) などが関わっているのではないかと述べている。

一方、第二言語としての日本語における音声習得と年齢との関係を調査した研究は、筆者らが知る限り皆無である。欧米では、以前から移民や外国人定住者が多く、第二言語として現地で話されている言語を習得する必要性から、外国語のアクセントに関する研究が盛んであった。しかし、日本の状況は欧米とは異なり、外国人定住者の日本語習得について体系的な調査が行なわれるようになったのもごく最近のことである。日本語音声習得と年齢に関する研究が研究途上である背景には、このような理由があるのではないかと考えられる。発音習得度に関わる個人的要因として、学習開始年齢と到着年齢ではどちらのほうが優勢なのであろうか。また、渡日回数は影響するのであろうか。このような研究課題は、外国人定住者のみならず、海外で日本語を学習する NNS にも関係がある。つまり、NS にとって聞きやすく滑らかな発音で話せるようになるためには、何歳頃から学習を始めたらいのか、また、渡日経験が必要なのか、それとも母国における学習で十分であるのか、といった疑問に対する示唆が得られることから、音声習得と年齢に関する研究は意義があると言える。そこで、日本語学習者および英語学習者各 80 名 (合計 160 名) の音声データを収集し、アンケート調査を行なった。

<調査結果>

2005 年 9 月現在、調査は進行中であるが、現在までの調査の結果、年齢と発音の評価にはマイナス相関関係が見られた (単語 $r=-0.575 \cdot p<0.05$ 、文 $-0.606 \cdot p<0.05$ 、会話 $-0.466 \cdot ns$)。つまり、年齢とともに発音の評価が下がっており、日本語学習者の発音の上達に年齢が関係していることが明らかになった。第二言語としての日本語における音声習得と年齢との関係を調査した先行研究はなく、本研究で初めて明らかになった結果である。なぜ発音の上達が年齢と関係するかという点においては、臨界期仮説との関係が無視できない。

しかしながら、本研究では単語では 4 名、その中でも単語・文・会話においてすべてネイティブレベルであると評価された 2 名の存在が確認された。その 2 名は両者ともに到着

年齢は 22 歳、学習開始年齢は 18 歳である。これは、完全に臨界期を過ぎてからの発音習得が可能であることを示唆する結果である。

発音に関する動機・ストラテジーにおいて、習得度の高い NNS に共通して高く見られた傾向は、「モデル聴取型ストラテジー」と「他者意識型ストラテジー」であった。「モデル聴取型ストラテジー」はモデル発音と自分の発音を比較したり、どう違うか考えて発音するというもので、「他者意識型ストラテジー」とは、自分の発音を聞いている相手の反応を気にしたり、自分の発音に対する評価を気にするというものである。

フォローアップ調査の結果、習得度の高い NNS に共通して学習初期にインプット洪水があったことと、意味や内容より音声的側面に焦点を当てた学習経験があることがわかった。現在、イマージョンやナチュラル・アプローチによる外国語学習に関する習得研究の成果から、第二言語習得が完全に意味中心で行われるとき、母語転移が最も顕著に表れる音声・音韻は習得されにくいことがわかっている。このような研究動向を踏まえた上で、発音習得度の高い NNS に共通して特定の言語構造、すなわち音声・音韻を重視した学習経験があるということは興味深い結果である。今後もこのような習得度の高い NNS の学習経験を参考に、いかに言語形式を焦点化し、効率的に音声習得を促すかということを検討していきたい。

また、習得度の高い NNS がモデル音声を用いてシャドウイングを行ったり、韻律特徴を記述するために自己流の記号をつけたりするという工夫をしていることも明らかになった。このようなストラテジーは日本語教育の現場にも応用できるのではないかと考えられる。

本プロジェクトの研究成果は、年度末に報告書として製本し、配布予定である。また、本サイトにも掲載する予定である。